

# 令和俳句論考

蒲生 友紀子

刃先より受け取る熊の肝一片 蘭草 慶子

どこにでも行けるさびしき白日傘

(第五句集「雪日」より)

静謐さただよう集中、掲句の一句目は「動」の中の「静謐」である。岩手県沢内でのこけしを生み出す木地師の取材。そしてその向かいに住むという湯田またぎの頭領。作者の「失われようとしている風土の姿を少しでも書き残せれば」との思いによって詠まれた魅力ある句が並ぶ。「勢子の声風にのりくる国境」「廻し呑むコップの生き血熊腑分」「熊汁の骨をごろりと吐き出しぬ」。氏の確かな目と表現によって、現場にいるかのように伝わってきた。二句目、「どこにでも行ける」の受けが「さびしさ」であることが意外で、印象に残った。その措辞によって、「白日傘」が空しさ・空虚・切なさ・さびしさを感じるものになり、季語の持つ意味の幅が広がり驚いた。他に「長き夜の認知症とは白き闇」や、御尊父を看取られた一連の作品にも心引かれた。さまざまな思いを「光陰のなだれ落ちたるさくらかな」が受け止めている。

氏は「秀」「星の木」所屬。

寒禽啼き土器は天地を語る マブソン青眼

通貨というまぼろし消えてススキ

(第十句集「ドリームタイム」より)

本集は氏の第十句集である。第八句集で得た「無垢句」の新韻律「五七三」のリズムに従ったとのこと。前半に火焰型土器へのオマージュ作品が並ぶ。「土器焰ゆる南北東西初音」。二〇二四年晩夏、氏は突如銷魂的な心境に至り、「人類が消えた後の地球」が見え、五千年後の清らかな無人地球へのタイムスリップ。オーストラリアのアボリジニが「ドリームタイム」と呼ぶ「原初の時間」への回帰に近いかと言う。「無垢句」は自由に、単純になり、具体的でないながら「この世(物質の世)とあの世(波動の世)の二重写し」の一物仕立ての句ばかりとなり、一つの題材で「二重底の意味」、「取り合わせ論」でいう「句付」も可能だと実感したとのこと。人類滅亡後の視点から人間中心の観点主義を離れ、人類存続の糸口が見つかるのではと、この句集が新たな「アニメイズム俳句」の旅への船出であることを希望されている。

氏は「海原」同人。現代俳句協会員。

自転車を遠き日へ漕ぐ麦の秋 朝長美智子

金継ぎ工房祝祭のごと揚羽蝶

(第一句集「更紗」より)

一句目、「麦の秋」はなぜか郷愁を感じさせる。自転車は間違いない前に向かつて漕いでいるのであるが、麦秋の中を漕ぐと、不思議と遠き過去へ遡っているように感じる。でもそれは、湿っぽいものではない。麦秋の乾いた音、金色に輝く視界、きつと作者は自転車を漕ぎながらここまでの道のりにも、そして現在にも満たされているのである。二句目、作者は金継ぎを習い始めたそ

うで、同句材は集中後半に複数取められている。掲句は「金」祝祭「揚羽蝶」と華やかな言葉がちりばめられている。句材の多さは時にマイナスに作用することが多いが、ここでは「金継ぎ工房」が全体を引き締めているように思う。それは古いものを大事にし、物の尊厳を高めていることもあり、金や銀などを使用するものの、決してうわべの華美ではないからではないか。静かにそつと現れた揚羽蝶が、華やかにしてくれている。

氏は「沖」沖長崎」同人。

日本のまんまなかで盆踊  
ゆつくりと水を解きて平泳ぎ

小川 竜胆

(第一句集「人は木に」より)

二〇二五年三月に定年を、さらに古希という人生の節目も迎えられ、御上梓されたとのこと。集中大らかな雰囲気が出ていて、一句目もたいへん大らかである。平易な表現でいて、「日本のまんまなか」とくれば郡上踊りのことかと想像した。だが、作者はそう限定していない。よって、読者は、自分が参加している盆踊をそう思ってもいいのである。そんな詠みぶりに心引かれた。二句目、平泳ぎをしている場面である。こちらは静かに「ゆつくりと水を解」くのである。泳ぐタイムも、その前後のことも今は気にせず、ただそのように今を満喫している作者。「ゆつくり解く」の措辞が読者もその世界に連れて行ってくれている。

氏は「雅楽谷」同人。

こころばへ美しと聚りて良夜かな  
身につきし家刀自の座や実万両

田島久美子

(第一句集「良夜」より)

集中に出てくる茶事にまつわる複数の場面がとても美しく、作者の日頃の暮らしぶりやたずまいが伝わってくる。特に一句目、ご子息のお嫁さんを詠まれた句。華美ではない表現であるにもかかわらず、お嫁さんの最高の美しさが伝わってくる。季語の「良夜」の働きが素晴らしい。二句目はご自身を詠まれたものと思われる。「家刀自」は「一家の主婦」のこと。一所懸命に家族を見守り、役目を果たしていく毎日。気づけば考えなくても自然に身体が動き、立ち回っている。そしてそのことに満足できている幸せ。「実万両」がそのことを伝えてくれる。

氏は「太陽」同人代表。

雪割つて父のつくりし通学路  
貫入の深き萩焼初手前

林 裕美子

(第一句集「るふらん」より)

氏が俳句を始めたきっかけは、師の長島衣伊子氏の「今しかない今を言葉にしませんか」の一言とのこと。集中には登山の句も多い。一句目は、日々の生活から生み出された。「雪割」るほどの冬の景。通学する子たちのために、大人は路を確保するべくシヤベル等で朝から奮闘する。中七下五のフレーズが父の存在と温もりを感じさせる。お母様が亡くなられた八日後にお父様も逝かれたそうである。「ちちははの乗る舟ひとつ冬銀河」。二句目、一読してその静かな景に入り込んだ。新年最初の茶の湯の席。そこで使われた萩焼の茶碗。「貫入の深き」の措辞によって、使い込まれ大事にされてきた茶碗が目につかんだ。

氏は「朴の花」同人。

(筆者住所 〒309-1622 茨城県笠間市南吉原二七九一五)